

難波の羅城をめぐる覚書—東アジアとの比較を中心に

村元健一

はじめに

日本の都城は、城壁のないことが大きな特徴として挙げられてきた。平城京も、その南正面に羅城門があるものの、門の東西両翼にそれぞれ一坊分にわたって築地塀を設ける程度であり、都城の正面を飾る視覚的效果はあるが、軍事的な防御機能を果たすことは不可能である。平城京に限らず日本都城は軍事的防御性が極めて希薄であり、その点は日本が最も海外から侵攻を受ける可能性が高まった中で築かれた大津宮も同様である。

そうした中で、『日本書紀』巻二九・天武紀の天武八年（679）十一月の「難波築羅城」という記述は、難波に羅城＝京城を囲む城壁が存在したものとして注目されてきた。しかし、現在に至るまで「羅城」の実態は不明である。

本稿では、同時期の中国や朝鮮半島の都城との比較の中で、難波の羅城がいかなるものかを考えることにしたい。なお、本稿は日本の都城の防御性について比較研究を行うにあたっての予察という性質もある。

1. 難波の「羅城」について

改めて『日本書紀』巻二九・天武紀の天武八年（679）十一月是月条の羅城記事を確認しておく。

是の月、初めて關を龍田山・大坂山に置く。仍りて難波に羅城を築く。

羅城にかかわる箇所原文は「仍難波築羅城」である。訓みにくい、通例に従い上記のように訓読しておく。「羅城」は、『書紀』ではここにだけ見える用語である。中国の正史では『魏書』『梁書』『南史』『旧唐書』などに確認できる。今挙げた諸書の用例では、「羅城」は城郭都市の外郭、ないし外郭の城壁を指している。「羅郭」とも表現されるが、それ以外の意味は見いだせない¹⁾。したがって、天武紀の「羅城」を都市域の外郭ないし郭城壁と解釈するのは自然のこととなろう。

この点については、代表的な書紀の注釈書である『日本書紀通證』『書紀集解』でも同様に解しており²⁾、羅城を難波京の外郭城壁と見なすことは以後通説となっている。この説に基づき、その痕跡を探ろうという動きは近世より存在する³⁾。しかしこれまでのところ、城壁の痕跡はなく、その遺構を確定するにはいたっていない⁴⁾。ただ、実録的な性格が強い天武紀に全く根拠のない記事を入れるとも考えにくい。そのため、現在に至るまで検討が重ねられているということになる。

この難波羅城の検討を発掘資料に基づいて行ったのが黒田慶一氏である〔黒田 2014〕。氏は羅城の記事を防御的施策と捉えた⁵⁾。その上で、細工谷遺跡、宰相山遺跡の古代の遺構を、難波羅城および烽火に結びつけて、古代難波の防衛体系の具体像に迫ろうとした。しかし、例えば氏が山城の水門との類似性を指摘し、羅城の一部と評価した細工谷遺跡の木製暗渠と整地層は、後に刊行され

た正報告書では、水田への灌漑施設とされている。周囲の地形と構造から見るならば、報告書の見解に従うべきだろう〔大阪文化財研究所 2018〕。また、氏が羅城の位置を考えるにあたり、比賣許曾神社文書を用いていることも厳しく批判されている〔積山洋 2020〕。以上のように氏の研究は、考古資料を用いて羅城の実態に迫ろうとした意欲作であるものの、羅城を解明したとはいえない。

黒田氏の研究を批判し、難波羅城について異なるアプローチをしたのが積山洋氏である〔積山 2020〕。氏は、「羅城」とは、難波宮を囲む宮城大垣を指す可能性を指摘される。「羅」の字義に「つらねる」⁶⁾があることからくる考えである。

なお、積山氏は、羅城と難波京を結びつけることに慎重な見解を示されている。この点は黒田氏の指摘に通じるものがあり、筆者も基本的に継承すべき視点と考える。

このように、羅城が難波の京城をめぐる外郭壁と捉える考え方とは異なる説が示された。ではこの考えを採り入れたとき、どのような「羅城」が想定できるのだろうか。国内ではその比較対象が限定されるため、同時代の東アジアの都城の防衛方法と外郭壁について見ておくことにしたい。

2. 中国と朝鮮諸国の都城

(1) 隋唐の都城

隋の大興城、東都城に淵源する唐の長安、洛陽は、いずれも外郭と内城（皇城と宮城）からなる。内城が堅牢な城壁で囲まれているのに対し、外郭城壁の規模は小さく、また造営記事も都城の着工からかなり遅れて現れる。両城の外郭壁の造営過程については、積山洋氏が簡潔にまとめられているため、氏の論考を参照しながら、その過程を確認しておきたい〔積山 2013b〕。

大興城は隋の文帝により築かれるが、外郭の造営は煬帝の大業9年（613）3月にずれ込む。さらに唐の高宗の永徽5年（654）3月に4万人を徴発して「長安羅郭」を築いており、同11月にも同様の記事が見える（以上、いずれも本紀による）。

また、隋の東都城の場合、『旧唐書』李昭徳伝によると外郭の造営は武則天の長寿年間（692-694）までずれ込む。以下の『資治通鑑』卷二〇五・長寿元年一月の記事にあるとおりである。

初め隋の煬帝 東都を作るも外城無し。僅かに短垣有るのみ。是に至りて鳳閣侍郎李昭徳始めて之を築く。

以上、積山氏がまとめられるように、隋唐の長安、洛陽はいずれも造営開始から外郭城の築城までかなりの時間が空いている。ただ、『通鑑』の記事に「無外城」とあると同時に「短垣」があったと記すことには注意が必要である。「短垣」は、『通鑑』卷二二一・唐肅宗の乾元二年の「羊馬城」についての胡三省注に「城外 別に短垣を築く。高さは纔かに肩に及ぶのみ。之を羊馬城と謂う」とあり、背の低い小規模な防壁を指すようである。したがって、隋代の都城の外郭城の本格的な建設が遅れたとはいえ、その間、全く無防備だったわけではなく、何らかの施設が都城の外郭を囲み、一定の防御機能を果たしていたことになる。

発掘調査によっても、洛陽では外郭城が隋代の城壁を唐代に拡大したことが確認されており、その規模は隋代で幅 1.5 ～ 2.2 m、唐代では 3 ～ 3.5 m とかなり厚くなっている〔中国社会科学院考

II. 論考

古研究所 2014]。この隋代の城壁が「短垣」と称されるものだろう。

長安については、外郭南面の西門である安化門が調査されている〔中国社会学院考古研究所陝西第一工作隊ら 2025〕。外郭城壁は2時期のものが確認されているが、それぞれ年代に関する報告はない。検出された安化門の遺構は唐代ものであり、それに先行する東西方向の水路が検出されている。報告者は隋代の安化門は標識程度だった可能性を指摘する。この水路は安化門の造営のために埋められているが、門の位置に対応するように架橋されており、何らかの施設はあったのだろう。なお、安化門は隋代には城門として未整備だったが、同じ南壁の中央門である明德門は5門道の門として隋代に築かれており〔中国科学院考古研究所西安工作隊 1974〕、郭城北城門の興安門は3門道で築かれている〔何歳利 2020〕。隋の大興城の外郭は、洛陽よりも簡易なものであった可能性はあるが、水路を大興城に伴うものと評価できれば、何らかの防衛機能は持っていた可能性はある。

一方で、中国の都城は都城単体に防御性を持たせるのではなく、より広域の自然地形を利用して防御体系をつくる。長安はその典型例で、関中盆地を天然の城壁と見立て、河川や主要交通路のおおる谷部に関城を設け、自然地形の弱点を補っている。洛陽は長安に比べ、こうした自然地形による防御性が低いことが懸念されているが、周囲に自然地形と関を組み合わせる防衛ラインをつくることは共通する⁷⁾。

隋の煬帝は、これに加え長大な溝をうがった人工の防御線をつくっている。『隋書』卷三・煬帝紀上に以下のようにある。

（仁壽四年（604））十一月乙未、洛陽に幸す。丙申、丁男數十萬を發し塹を掘らしむ。龍門より東して長平・汲郡に接し、臨清關に抵り、河を度り、浚儀・襄城に至り、上洛に達す。以て關防を置く。

この史料の記述された地名を追っていくと次のとおりとなる。まず、黄河屈曲部の東側、黄河が南流する龍門から黄河の北側を東へと伸びて長平郡、汲郡を経てさらに東の臨清関に至る。そこで黄河を南に越えて西向し、浚儀、襄城、上洛へと至るルートとなる。これは、洛陽の周囲に設けられた孟津関、虎牢関、大谷関などのいわゆる洛陽八関よりもさらに広範囲であり、なおかつ、「塹」という物理的な障壁を築き、関防を置いた新たな防御施設である。この工事直後に煬帝が東京造営を宣言していることを考えると、新たな都城造営に先立ち、防御面で不安のある洛陽の防備を人工的な構造物で補おうとしていたことが分かる。

このように隋唐の都城には、単に都市域の防御だけではなく、より広域の防御線を有することに他都市とは異なる特徴がある。

(2) 朝鮮の都城

朝鮮の都城については李陽浩氏の論考を基にしながらまとめておきたい〔李 2004〕。百済の扶余は北と東と南は蛇行する錦江（白馬江）に囲まれ、北には扶蘇山があり、扶蘇山城が築かれる。東は羅城が築かれ、都城の東を画するとともに、都城と陵墓域を区画する。都城そのものには城壁を築かないが、やや広い範囲を城壁と自然の山と川と結びつけることで防御体系としている。

新羅の慶州は西川、南川、北川に囲まれるように京城を形成する。王宮である月城は自然丘陵上

に築かれており、南面を南川に面する断崖を利用して防御線をつくり、他の三面を城壁と堀で囲む。また慶州は周囲を山に囲まれた盆地だが、その山々には、明活山城や西兄山城、南山新城などの山城を築き、都城の防備を固めている。都城全体を囲む城壁はないが、自然地形と山城で王都の守りを固めている。

日本では大宰府の防御体系が著名だが、それは山城である大野城や基肄城と、水城などの防御線を連続させて築いている。地形を利用し、人工構造物で補完する防御体系は扶余に近いものであり、大野城の造営が白村江の敗戦の後、百済人である憶礼福留、四比福夫らによってなされたことと関係しているのだろう。

それまで日本になかった拠点防衛の体系が、侵攻を受けるという危機感と亡命百済人の存在により、大宰府で具体化されたのである。この拠点防衛の考えが以後の日本の都城にも何らかの影響を与えたと考えることができる。次に白村江から天武朝にかけての日本の都城の様子をみていきたい。

3. 古代宮都と羅城

(1) 飛鳥

飛鳥は南北に細長い盆地であり、中央を飛鳥川が北流する。盆地の北端に近い平坦部に築かれたのが飛鳥寺であり、飛鳥宮はその南方に築かれる。周囲が丘陵で囲まれるという点で、難波とは明らかに立地、景観が異なる。

こうした自然地形を巧みに利用した防御施設の存在を想定したのが相原嘉之氏である〔相原 2017〕。相原氏の説は甘樫丘から周囲の丘陵の尾根上に掘立柱塀が巡ることを想定したもので、盆地北端の開口部には飛鳥寺があることから、寺院もその防御施設の一部に組み込まれていたとする。その囲む範囲は飛鳥宮を中心として鳴宮から石神遺跡に及ぶ。白村江の敗戦や壬申の乱の緊張を契機に、主に西方からの侵攻を想定した防衛ラインとしている。今後、発掘調査によりこの仮説が検証されることになるが、興味深い指摘である。

(2) 大津宮

大津宮は西の比叡山から東の琵琶湖の間の平坦面に位置するが、東西に狭隘な場所で大規模な都市域をつくるのは困難な立地である。一方、こうした自然地形は比較的、防御に向いているといえる。南は瀬田橋が交通の要衝であると同時に防衛の要となる。北には三尾城が造られた。大津宮を東と西から攻撃することは難しいため、南北を重点的に守備する必要がある。ここでは羅城はないが、三尾城が都城を守る重要な拠点となっていたことは、壬申の乱に際して攻略されていることからうかがうことができる。

三尾城の場所は特定されていないが、琵琶湖に突出した高島市の見張山に想定する案がある〔石田敏 1982〕。山の北麓には水尾（みお）神社もあり、周辺に三尾城があった可能性は高いと思われる。この想定地は、大津宮中心地とされる錦織遺跡から直線距離で 30 km も離れており、宮都防衛の拠点とした場合、かなり距離があることが注目される。三尾城の構造については古代山城という見方が多いが、「斥候」のような監視所ではなかったかとの指摘もある〔向井一雄 2017〕。相原氏は

II. 論考

東西に狭隘な地に営まれた大津京の範囲は瀬田橋から三尾城までとし、その防衛体系には飛鳥との関連性が強く、また飛鳥よりも堅牢であったと考えられている〔相原 2017〕。

(3) 難波

難波宮は上町台地の北端に位置する。その場所は、後世の大坂城の場所に近い。豊臣期大坂城の防御体系を参考にするならば、北は大川、西は海もしくは東横堀前身の水域と上町台地の崖面が防衛機能を果たしたと考えられ、東面はいわゆる河内湖や上町台地東側斜面が防御線になると考えられる。したがって、稜線上に比較的平坦な土地が続く難波宮南方が防衛上は最大の弱点となる。豊臣期の大坂城では南側に台地を横断する形で堀を設けることで新たな防衛線を築いたが、古代にあってはそのような痕跡は見いだせない⁸⁾。

ここで改めて『書紀』の記載に立ち返り、検討を加えることにしたい。

4. 難波羅城

(1) 難波羅城の史料について

天武 8 年 11 月是月条の原文は以下のとおりである。

是月、初置關於龍田山・大坂山。仍難波築羅城。

前段の関の記事と後段の羅城記事が「仍」で結ばれていることに注目する必要がある⁹⁾。「仍」字は、天武紀下の中で 33 か所用いられており、その意味は若干異なる。一覧にしたものが表である。参考までに『書紀』の主な訳注本がどのように解釈しているかを付した。訓読では岩波本、小学館本ともに「よりて」「なほ」の 2 通りの訓みをしている。また、小学館本と中公本の現代語訳をみても、「よって」「そして」「そうして」など、ややニュアンスの異なる訳をしているが、総じて言えるのは、「仍」はこの文字の前後の文をつないでいることである。表の「整理記号」の欄で A としたのは、前文と後文の因果関係があると解釈でき、「そのため」「それによって」と訳することができるもの、B としたのは、前文とつながりがあるが因果関係は明確でなく、「そして」と訳すか、一連の文章として解釈できるものである。B のものでも前文と無関係ではないことは明らかである。

こうしてみると、難波羅城の記事も「仍」字の前の文である「是の月、初めて關を龍田山・大坂山に置く」と関連があることは明らかであり、中公本、小学館本ともに一連の文章として訳している。つまり、因果関係は明確ではないが、関の設置と羅城建設は関連のある事業ということになる。因果関係を強調すれば、「竜田山・大坂山に關を置いた。これによって難波に羅城を築いた」と訳することになるが、意味がとおりにくい。『書紀』の中で「羅城」が指すものが不明であるため、これらの関の設置をもって難波の羅城造営と見なすこともできるが、やや強引である。となると「竜田山・大坂山に關を置いた。また、難波に羅城を築いた」くらいの意味となり、各現代語訳が妥当であると認められ、B の分類となる。

前段の竜田山、大坂山に關を置いたのは、河内と大和を隔てる山地で標高が低い場所であり、重要な交通路となる一方、軍事的には防壁の切れ目となるためである。壬申の乱の際に、このルートで河内から大和への近江方の軍勢の侵入を許し、天武側の大伴負吹らが苦戦したことからも、その

表 『書紀』天武期の「仍」の用例

番号	年	月	日	史料	岩波	中公	小学館		整理 記号	
					よみ	訳	よみ	訳		
1	天武	2	3	壬寅	三月丙戌朔壬寅、備後國司、獲白雉於龜石郡而貢。乃當郡課役悉免。仍大赦天下。	なほ	免除し、全国に大赦を行った。	よりて	免除し、天下に大赦を行った。	B
2	天武	2	8	癸卯	癸卯、高麗遣上位頭大兄邯子・前部大兄傾干等朝貢。仍新羅遣韓奈末金利送高麗使人于筑紫。	よりて	朝貢した。そこで新羅は、	よりて	朝貢した。そこで新羅は	A
3	天武	2	8	戊申	戊申、喚賀騰極使金承元等、中客以上廿七人於京。因命大宰、詔耽羅使人曰、「天皇新平天下、初之即位。由是、唯除賀使、以外不召。則汝等親所見。亦時寒波嶮。久淹留之、還爲汝愁。故宜疾歸」。仍在國王及使者久麻藝等、肇賜爵位。	なほ	そして、国にいる王や使者の	よりて	そうして本国の王及び使者	B
4	天武	4	4	壬午	壬午、詔曰、「諸國貨税、自今以後、明察百姓、先知富貧、簡定三等。仍中戸以下應與貨」。	よりて	まず貧富によって三等級により分け、中級以下の戸に貸し与えることとせよ。	よりて	三等に選び別けよ。そのうえで中戸以下に貸与せよ。	B
5	天武	4	6	乙未	六月癸酉朔乙未、大分君惠尺病將死。天皇大驚、詔曰、「汝惠尺也、背私向公、不惜身命。以遂雄之心勢于大役、恆欲慈愛、故爾雖既死、子孫厚賞」。仍膺外小紫位。未及數日、薨于私家。	よりて	～」と言われ、外小紫位に昇進させた。	よりて	～」と仰せられた。そうして外小紫位に昇格させた。	B
6	天武	5	8		是月、大三輪眞上田子人君卒。天皇聞之大哀。以壬申年之功、贈内小紫位。仍諡曰大三輪神眞上田迎君。	よりて	また、大三輪眞上田迎君の諡号を賜った。	よりて	そうして諡して大三輪眞上田迎君といった。	B
7	天武	5	11	丁亥	丁亥、高麗遣大使後部主簿阿于・副使前部大兄徳富朝貢。仍新羅遣大奈末金楊原、送高麗使人於筑紫。	よりて	このため、新羅は大奈末金楊原を遣わし、	よりて	そこで新羅は大奈末金楊原を派遣して、	A
8	天武	7	4	丁亥	夏四月丁亥朔、欲幸齋宮卜之。癸巳食卜、仍取平旦時、警蹕既動。百寮成列、乘輿命蓋、以未及出行、十市皇女、卒然病發、薨於宮中。	よりて	そこで、平旦の時をえらび、	よりて	これによって、平旦時を選び、	A
9	天武	7			是年、新羅送使奈末加良井山・奈末金紅世、到于筑紫曰、「新羅王遣級食金消勿・大奈末金世々等、貢上當年之調。仍遣臣井山、送消勿等。俱逢暴風於海中。以消勿等皆散之、不知所如。唯井山僅得著岸」。然消勿等、遂不來矣。	よりて	また、臣井山を遣わして、	よりて	よって、私井山を派遣して、	A
10	天武	8	11	己亥	己亥、大乙下倭馬飼部造連爲大使、小乙下上村主光欠爲小使、遣多嗣嶋。仍賜爵一級。	なほ	よって爵一級を賜った。	よりて	よって爵一級を授けられた。	A
11	天武	8	11		是月、初置關於龍田山・大坂山。仍難波築羅城。	よりて	この月に、はじめて関を竜田山と大坂山とに置き、難波には羅城（京の四周にめぐらす城壁）を築いた。	よりて	この月に、初めて関を竜田山・大坂山に置き、難波に羅城を築いた。（※大坂山の注に、竜田道と大坂道とに関を置いたのは外敵（主として新羅）の侵攻に備えたものか。羅城の注。都市の周囲をめぐる城。「古代・中世ヨーロッパや中国に多くみられるが、古代の日本ではこれが唯一の例。	—
12	天武	9	2	壬申	壬申、新羅仕丁八人、返于本土。仍垂恩以賜祿有差。	よりて	そこでおことばを賜り、それぞれに祿物を賜った。	よりて	そこで恩情を垂れ相応に賜祿があった。	A
13	天武	9	5	丁亥	丁亥、高麗遣南部大使卯間・西部大兄俊徳等朝貢。仍新羅遣大奈末考那、送高麗使人卯間等於筑紫。	よりて	このため、新羅は大奈末考那を遣わし、	よりて	そこで新羅は大奈末考那を派遣して、	A
14	天武	9	11	癸未	癸未、皇后體不豫。則爲皇后誓願之、初興藥師寺。仍度一百僧。由是、得安平。是日、赦罪。	よりて	よって一百の僧を得度させたと、	よりて	よって百人の僧を得度させた。	A
15	天武	10	正月	丁丑	是日、親王諸王引入内安殿。諸臣皆侍于外安殿。共置酒以賜衆。則大山上草香部吉士大形、授小錦下位。仍賜姓曰難波連。	よりて	大山上草香部吉士大形に小錦下の位をお授けになり、姓を賜って難波連といった。	よりて	大山上草香部吉士大形に小錦下位を授けられ、姓を与えて難波連といった。	B
16	天武	10	3	甲午	甲午、天皇居新宮井上、而試發鼓吹之聲。仍令調習。	よりて	音をためし、練習を行わせた。	よりて	音を発して、調律し練習させられた。	B
17	天武	11	3	甲午	三月甲午朔、命小紫三野王及宮内官大夫等、遣于新城、令見其地形。仍將都矣。	よりて	その地形を視察させ、都を造ろうとされた。	よりて	その地形を視察させた。そうして都を造ろうとした。	A
18	天武	11	6	丁卯	丁卯、男夫始結髮。仍著漆紗冠。	よりて	はじめて髪を結いあげ、漆紗冠を着用した。	よりて	初めて髪を結い、漆紗冠を着けた。	B
19	天武	11	7	戊午	戊午、饗卑人等於飛鳥寺西。發種々樂。仍賜祿各有差。道俗悉見之。	なほ	さまざまな舞樂を演奏し、それぞれに祿物を賜った。	よりて	種々の歌舞を奏した。そうして各々に応じて賜祿があった。	B
20	天武	12	正月	乙未	乙未、親王以下及群卿、喚于大極殿前、而宴之。仍以三足雀、示于群臣。	よりて	宴を行われ、三つ足の雀を群臣にお見せになった。	よりて	宴会を催された。そうして三本足の雀を群臣にお見せになった。	B
21	天武	12	6	己未	六月丁巳朔己未、大伴連望多夢。天皇大驚之、則遣泊瀬王而弔之。仍舉壬申年勳績及先祖等每時有功、以顯寵賞。乃贈大紫位、發鼓吹慶之。	なほ	弔間にお遣わしになり、壬申の年の武勲とその先祖たちが世々立ててきた功績とをたたえ、	よりて	弔問され、壬申の年の功績と、先祖たちのその時々々の有功を挙げて顕彰し、	B
22	天武	14	正月	丁卯	丁卯、更改爵位之號。仍增加階級。	なほ	爵位の称号を改め、位階を増加した。	よりて	爵位の名を改めた。そうして階級を増し加えた。	B

II. 論考

23	天武	14	3	己未	三月丙午朔己未、饗金物備於筑紫。即從筑紫歸之。仍流著新羅人七口、附物備還之。	よりて	筑紫から帰途についた。そこで、漂着した新羅の人七人を、物備に従わせて帰した。	よりて	そうして筑紫から帰国した。そこで漂着した新羅人七人を	A
24	天武	14	11	己巳	己巳、新羅遣波珍浪金智祥・大阿浪金健勳請政。仍進調。	よりて	国政のことを奏上し、調をたてまつった。	よりて	政局を報告し、朝貢した。	B
25	朱鳥	1	正月	癸卯	朱鳥元年春正月壬寅朔癸卯、御大極殿、而賜宴於諸王卿。是日、詔曰、「朕問王卿、以無端事。仍對言得實必有賜」。	よりて	これから王卿に無端事を尋ねよう。もし当たったら、かならず賜いものをしよう	よりて	私は王卿に無端事を尋ねるが、正しく答えれば、必ず賜物がある。	B
26	朱鳥	1	正月	庚戌	庚戌、請三綱律師、及大官大寺知事、佐官、并九僧、以俗供養々之。仍施施縣布各有差。	なほ	俗人の食べ物で供養し、ほかにそれぞれ施・縣・布をお贈りになった。	よりて	食物を供した。そうして施・縣・布を、各々に応じて施した。	B
27	朱鳥	1	4	壬午	壬午、爲饗新羅客等、運川原寺伎樂於筑紫。仍以皇后宮之私稻五千束、納于川原寺。	よりて	川原寺の伎樂を筑紫に運んだ。このことにより、皇后の宮の私稲五千束を川原寺に納めた。	よりて	川原寺の伎樂を筑紫に運んだ。そうして皇后宮の私用の稲五千束を川原寺に納めた。	A
28	朱鳥	1	5	戊申	是日、侍醫百濟人億仁病之臨死。則授勤大壹位。仍封一百戸。	よりて	勤大壹位の位をお授けになり、食封一百戸を賜った。	よりて	勤大壹位を授けられた。そうして封百戸を与えた。	B
29	朱鳥	1	6	己巳	六月己巳朔、槻本村主勝麻呂賜姓日連。仍加勤大壹位、封廿戸。	よりて	姓を賜って連といい、勤大壹位の位を加え、また食封二十戸を賜った。	よりて	賜って連といった。そうして勤大壹位を加えて封二十戸を与えた。	B
30	朱鳥	1	6	丁亥	丁亥、敕之、遣百官人等於川原寺、爲燃燈供養。仍大齋之悔過也。	なほ	燃灯供養を行ない、盛大な齋会を設けて悔過を行った。	よりて	燃灯供養を行った。そうして大齋会を行い悔過した。	B
31	朱鳥	1	7	壬寅	壬寅、半減天下之調。仍悉免徭役。	なほ	全国について調の半分会免除し、徭役のすべてを免除した。	なほ	天下の調を半分に減じた。さらにすべての徭役を免除した。	B
32	朱鳥	1	7	七月	戊午、改元曰朱鳥元年。仍名宮曰飛鳥淨御原宮。	よりて	改元して朱鳥元年といい、宮をなづけて飛鳥淨御原宮と名づけた。	よりて	改元して朱鳥元年という。そうして宮を名づけて飛鳥淨御原宮と名づけた。	A
33	朱鳥	1	9	丁卯	丁卯、僧尼發哀之。是日百濟王良虞、代百濟王善光而誄之。次國々遣等、隨參赴各誄之。仍奏種々歌舞。	よりて	それぞれ誄し、さまざまな歌舞を演奏した。	よりて	それぞれ誄を申し述べ、種々の歌舞を奏した。	B

※「岩波」は坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野普『日本古典文学大系 日本書紀』岩波書店 1965年、「中公」は井上光貞監訳『日本書紀』中央公論社 1987年、「小学館」は小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守『新編日本古典文学全集 日本書紀』小学館 1998年。

軍事的な重要さは容易に想定できる。「難波の羅城」が築かれた当時、天武の拠点は飛鳥であり、難波方面からの侵攻を想定して大和の防御を目的に、この2か所に関を置いたのだろう。この前段との関連を考えるならば、難波の羅城造営は、関の設置ともに飛鳥防衛に関係するものと見なすこともできる。飛鳥を守るために、西方の拠点である難波の防御を整えたと考えるのである。この想定に基づいて難波の羅城のあり方を検討したい。

(2) 難波羅城の構造

羅城の遺構がない中でその構造を云々することはあまり建設的でないかもしれない。だが、羅城のあり方の可能性を考えることは今後の遺跡調査のために無駄ではないと考える。

まず、天武8年の段階で難波に京は置かれていない。天武12年の複都構想に先立ち、この年から京の再整備を進めたとみることできるが、それは羅城が京の外郭壁であるという近世以来の通説から導き出される考えである。吉田晶氏がすでに指摘されているが、羅城造営が「難波京」ではなく「難波」と記していることを重視したい〔吉田1982〕。

当時の難波は難波宮、難波津を始めとする重要施設が存在しており、これらの施設が守るべき対象となる。そうすると、守備する範囲は不定形なものであり、上町台地という起伏に富んだ地形や周囲の水域を利用し、自然の障壁のない部分は堀や土塁で守りを固めた姿が想定される。つまり古代山城や大宰府の防衛ラインのようなものである。

ただし、先述のように、難波の防衛に関の設置と関連づけて考えるのであれば、これらはいずれ

も当時の都である飛鳥を守るものと見るべきだろう。難波も壬申の乱では要地として登場しており、特に西から飛鳥を攻める際には軍事拠点となる場所であった。羅城の造営は、微視的には難波を守るためであるが、構想全体としては、飛鳥防衛の一環として、戦略的要地である難波の守備を固めることに主眼があったのだろう。

関と羅城の設置を見ると、飛鳥防御のために自然地形を利用して関を置くという考え方は隋唐都城の防衛体系に近い。一方、難波だけみれば、百済の扶余の影響が強いと考える。7世紀後半において、広域の防衛施設をつくるノウハウは百済人が持っていたと考えるからである。

(3) 難波羅城の建設契機

それではなぜ、天武8年という時期に難波に羅城が築かれたのだろうか。国内的には同年5月に吉野の盟約が行われているように、天武の後継者問題がこの時期に具体化していたことを挙げることができる。特に、天武自身が壬申の乱において、河内と大和の間の山地の防御的な重要性に加え、西国統治の要としての難波の重要性を痛感したと思われ、そうした過去の経験を踏まえ、万が一、再び内乱が生じた場合に備え、難波防衛の策を打ったと考えることもできよう。

対外的には、この時期、あまり大きな問題はないように見える。新羅との交流は密に行われており、特に両国間で摩擦があったように思えない。しかし、朝鮮半島情勢は、唐と新羅の半島支配をめぐる戦争が、新羅の優位のうちに終息しており、676年には半島から唐の勢力が駆逐されている。半島をとりまく状況が大きく動いているのである。こうした情勢変化への天武朝の具体的な対応は見えないが、やはり西からの侵攻に備え、飛鳥のある大和防御のための手段として関が置かれ、対外的な表玄関である難波に羅城が造営されたと考えることもできるだろう。

いずれも羅城設置の決定的な理由ではないが、これらの内外の情勢がその一因となったのだろう。

おわりに

本稿では難波の羅城と同時代の中国、朝鮮都城の防御施設との初歩的な比較を行い、その実態について考えてみた。

中国の都城に顕著だが、都城自体は天命を受けた天子の都を表徴することが重要であり、有徳の君主が軍事的防御を徹底的に施した要塞のような都に住むのは体裁面で問題があろう。そのため、都城の防御機能は、都城を大きく取り囲む自然地形とそこに設けられた関が担い、実質、そこが最終の防衛ラインとなっていた。隋の煬帝はその外側に「塹」を設け、さらに防御性を高めたのである。天武8年11月の竜田・大坂の関の設置はこれに近く、難波の羅城造営もそれを補完ないしその防衛構想の一環をなすものだったのだろう。

朝鮮半島の都城でも、百済の扶余では街区をより広く囲む範囲に羅城を設け、山城や錦江と合わせることで防衛線をつくった。新羅も周囲の山城と河川を組み合わせている。日本には白村江の敗戦後に、百済人によってこうした防御体系のあり方が大宰府に導入された。難波の羅城を難波地域の防衛という限定した範囲で考えるならば、百済の防衛体系を真似たものとなったのだろう。

このように、難波羅城の造営とは、天武朝にとっては飛鳥西方防備の一環であり、竜田・大坂の

II. 論考

関の設置と深い関係があるものと考えた。確かに難波を防備するための施設であるが、巨視的には、東方の飛鳥を竜田・大坂の関とともに守るべき施設と位置付けることができるのだろう。

【註】

- 1) 煩雑になるが、各書の羅城の記事を以下に記しておく。『梁書』『旧唐書』については1例のみとした。『魏書』卷五八・楊播伝「遂後竟襲壽春、入羅城而退」、同書卷九二・任城國太妃孟氏伝「澄為揚州之日、率眾出討。於後賊帥姜慶真陰結逆黨、襲陷羅城」、『梁書』卷三・武帝紀「壬戌、宣毅將軍裴邃襲壽陽、入羅城、弗剋」、『南史』卷六三・王僧辯伝「攻拔魯山、仍攻郢、即入羅城」、『舊唐書』卷三八・地理志一・河南道・汴州上「建中二年、築其羅城」など。
- 2) 『日本書紀通證』の羅城の注は以下のとおりである。『東京記』曰く、周の世宗の顯德二年、詔して京城の四面、別に羅城を築かしむ、と。『通鑑』唐懿宗紀に、時を移さず羅城を克す。彦曾退き子城を保つ。胡註に羅城は外の大城なり、子城は内の小城なり、と。『訓蒙字會』に郭は俗に羅城と稱す、と。『三代實録』曰く、羅城門は是れ周の國門、唐の京城門なり。『延喜式』に羅城の御贖有り、世毎に一たび行ふ、と。『書紀集解』の注は、『通證』に引かれた『東京記』『三代實録』『通鑑』『訓蒙字會』に加えて『秉燭談〔譚〕』から「唐書に曰く高宗の時、京師の羅郭を築く」という文を引いた上で、「此に由り之を觀れば、羅は周羅、網羅の義なり。羅城門と謂うは郭城門なり」とまとめている。このまとめも『秉燭譚』の伊藤東涯の説とほぼ同じだが、要するに羅城を、都市の外郭を囲む郭壁の事と認識していることが分かる。
- 3) 曉鐘成の『摂津名所図会大成』卷之六に「羅城古蹟」の項目があり、鐘成の案語として「方角詳ならず。一説に天王寺の辺といふ。いにしへは羅城土居といへる字の地ありしよし。今は其の字も聞ずなりぬ」とあるように、鐘成自身は羅城土居なるものを確認できていない。この羅城の項目は、比賣許曾神社文書に基づいている。この文書群中の建武二年の神社の四至を述べたものがあり、その中に「南羅城土居」とある〔長山雅一 1988〕。この文書については、積山洋氏がすでに指摘されているが〔積山 2020〕、喜田貞吉氏や瀧川政次郎氏が痛烈に批判されるように近世の偽作であろう〔喜田 1900・1901、瀧川 1958〕。
- 4) 羅城を遺存地名や地形から復原し、京城との関係を論じたものに澤村仁氏の研究がある〔澤村 1998〕。難波京の研究史については積山洋氏が詳細にまとめられている〔積山 2013a〕。
- 5) 黒田氏は羅城記事を「畿内防衛のための『関防』に関する条文であり、難波宮を近江軍に押さえられた、天武帝の壬申の乱の反省からの防御的施策と考えられる」とされている。本稿では黒田氏のこの「関防」に関わるものという指摘を継承する。
- 6) 例えば『大漢和辞典』では、羅の語義として以下のものを挙げる。①あみ。②あみする。③からめる。④しく。⑤つらなる。つらねる。⑥かかる。あふ。⑦きぬ。(以下略)。「つらねる」の字義は『広雅』釈詁一の「羅は列なり」による。
- 7) 時代は異なるが、洛陽を始め、南北朝時代の中国都城の防御性については、〔塩沢裕仁 2013〕参照。
- 8) 上町台地を東西に切り込むように自然の谷があり、四天王寺の南には和氣清麻呂が開削を開始した水路の跡との伝承をもつ谷地形もある(「河底谷」)。こうした谷を防御に利用することは可能だが、それを積極的に示す証拠はない。なお、「河底谷」に人による掘削の手が加えられた可能性は否定できないとされて

おり〔大阪文化財研究所 2013〕、現状の地形から天武朝の難波の地形を考えるのは注意が必要である。

- 9) 「仍」字についてはすでに岸俊男氏が兩文を接続していることに着目しているが、両者がどう結びつくかは必ずしも明らかでないとされている〔岸 1988〕。

【主要参考文献・引用文献】

- 相原嘉之 2017「倭京の守りー飛鳥地域における防衛システム構想」同氏『古代飛鳥の都市構造』吉川弘文館(初出 2004)
- 石田敏 1982「壬申の乱における三尾城の所在をめぐって」『滋賀文化財だより』NO. 64
- 大阪文化財研究所 2013『北河堀町所在遺跡発掘調査報告』
- 大阪文化財研究所 2018『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅲ』
- 何歳利 2020「唐長安城大明宮興安門遺址発掘与研究」『南方文物』2020 年 3 期
- 岸俊男 1988「難波の都城・宮室」同氏『日本古代宮都の研究』岩波書店、1988 年(初出 1977)
- 喜田貞吉 1900「難波沿革図の偽作」『歴史地理』2-7
- 喜田貞吉 1901「偽作難波図の害毒」『歴史地理』3-5
- 黒田慶一 2014「難波京の防衛システムー細工谷・宰相山遺跡から考えた難波羅城と難波烽」公益財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所編『大阪上町台地の総合的研究ー東アジア史における都市の誕生・成長・再生の一類型』
- 小島憲之 1972『上代日本文学と中国文学 上』塙書房
- 澤村仁 1998「難波京の羅城と後期難波京の外京、他二三の問題について」『条里制古代都市研究』14 号
- 塩沢裕仁 2013『後漢魏晋南北朝都城境域研究』雄山閣
- 積山洋 2013a「難波京研究史」同氏『古代の都城と東アジアー大極殿と難波京』清文堂(初出 2010)
- 積山洋 2013b「中国古代都城の外郭城と里坊の制」同氏『古代の都城と東アジアー大極殿と難波京』清文堂(初出 2011)
- 積山洋 2020「難波羅城と天武朝難波宮の外郭」中尾芳治編『難波宮と古代都城』同成社
- 瀧川政次郎 1958「比賣許曾神社偽書考」上・中・下『史迹と美術』28-6～8
- 中国科学院考古研究所西安工作隊 1974「唐代長安城明德門遺址発掘簡報」『考古』1974 年 1 期
- 中国社会科学院考古研究所 2014『隋唐洛陽城 1959～2001 年考古発掘報告』文物出版社
- 中国社会科学院考古研究所陝西第一工作隊・西安市隋唐長安城遺址保護中心 2025「西安市隋唐長安城安化門遺址的発掘」『考古』2025 年 8 期
- 長山雅一 1988『『羅城土居』と書かれた文書について』『葦火』15 号
- 向井一雄 2017『よみがえる古代山城ー国際戦争と防衛ライン』吉川弘文館
- 吉田晶 1982『古代の難波』教育社
- 李陽浩 2004「朝鮮半島における都城・寺院の近年の調査」大阪歴史博物館編『特別展古代都市誕生』